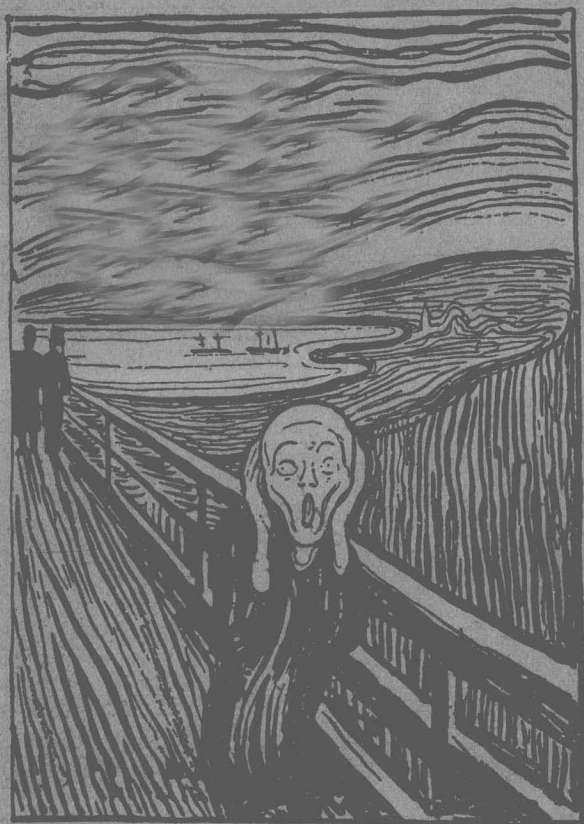


ジュース
cis

正 瀬 廣



叫び——エドワード・ムンク

ツ イ ス

5 2 0 円

© 1971

初版印刷

1 9 7 1 年 4 月 20 日

初版発行

1 9 7 1 年 4 月 25 日

著 者

広瀬 正

発行者

中島隆之

発行所

河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6

TEL 東京(292)3711

振替 東京10802

印刷所

株式会社堀内印刷所

製本所

大口製本印刷株式会社

目次

エンディング

レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	イントロ
ベ	ベ	ベ	ベ	ベ	ベ	ベ	ダクシ
ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ョン
0	6	5	4	3	2	1	

ツ
イ
ス

装幀 和田誠

イントロダクション

1

コンクリート製の門柱に掲げられた白木の門標には、ただ四文字、病院の名が書かれてあるだけだった。

その門を、色の黒い、やせた青年がはいって行く。

遠くで、列車の音がしていた。

ここは神奈川県C市の西のはずれ、東海道本線の線路から2キロほど離れた所である。昼間でもこうして列車の音が聞こえてくるのは、この辺が静かなせいであろう。騒音は、おそらく40ホン以下か。病院の環境としては絶好といえる。

正門をはいって少し行くと、円形の花壇があり、タンポポの花が咲いていた。

青年は、タンポポには目もくれず、花壇の右側をまわり、

中央の建物に向かって行く。紺の背広を着て、きちんとネクタイを締めているが、足もととは下駄ばきだった。そして、ズボンの下に靴下が見えるのは左足だけで、はだしの右足は、かかとからくるぶしにかけて包帯が巻かれていた。が、それほど傷でもないらしく、びっことはほとんどひいていなかった。

建物の入口の、飾りガラスのドアにも、病院名以外の字は、何も書かれていなかった。

青年がノブを引くと、ドアの下にはさまっていた、海岸地帯特有の、サラサラした砂土がギーツと気味の悪い音をたてた。が、青年は、気にもとめず、ドアを大きく開いて、中にはいった。

そこは横長の、コンクリートの土間になっており、右手に、土間と、一五センチほど高いリノリウム張りの床との両方にまたがって、受付があった。

青年は、その窓口へ行くと、内ポケットから小さくたたんだ紙片を取り出し、開いて差し出した。

窓口の中の、口紅を濃く塗った、やはり年は争えないといった感じの看護婦は、相手を見ずに紙片を受け取り、つまらなそうに目を走らせた。それから、上目使いに青年を見て、「この予約は来週ですよ。きょうじゃありません」

といった。

「でも」と青年は口をとがらせて、答えた。「もう薬がなくなっちゃったんです」

看護婦は上目使いのまま、しばらく考えていたが、

「それじゃ、上がって、しばらくお待ちください」

と、暗誦するようにいい、インターホンに手をのぼした。

青年はくるりと向きを変え、土間の反対側へ行った。ロッカー式の靴箱の前に簀の子がおかれ、その上に〈外来用〉とマジックインキで書かれた、茶色のスリッパが六つばかり、ちらばっている。どれも縫い目が口をあけてしまったりして、満足なのは一つもない。青年は、その中から、どうにか使えそうなものを選び出してはくと、脱いだ下駄を大切に靴箱にしまった。

ロビーの待合所は二〇平方メートルぐらいの広さだった。ソファと折りたたみ式の椅子をとりまぜ二〇人ぶんほどが、入口を背にして、三列にならんでいた。椅子はほとんど満員だった。

青年は、最後列のはしから二番めの椅子が空いているのを見つけて、そこへ行って坐り、落着かない様子であたりを見まわしはじめた。

正面の壁に電気時計があり、その下に〈面会人の方へのお

願い〉という大きな紙が貼ってある。面会時間、面会の予約についての項目のつぎに、へ一、患者さんに御寿司等腐敗しやすい物を上げないで下さいと書いてある。

貼紙の左下に、16型の白黒テレビが置かれ、一時からのNHKの番組が、ちらつきながら映っているが、椅子に坐った人々は、誰も画面を見ていない。備えつけの週刊誌やマンガ雑誌を読んだり、タバコを吸ったり、話をしたり、あるいはただぼんやりしている。

左側に、デパートの食堂で蠟細工の見本を飾ってあるような陳列ケースが置かれてある。その中には、ハンドバッグ、宝石箱、ペン皿、花びんなど、入院患者の製作品がならんでいた。

青年は、あちこち見まわし終わると、となりに坐っている男に話しかけた。

「ずいぶん混んでいますね」

いきなり話しかけられた相手はびっくりして青年の顔を见、「ええ」と答えた。不精髭を生やし、グレーのジャンパーを着た四五、六の男である。

「ぼくは薬をもらいにきたんです」と青年は続けた。「薬が足りなくなってしまうんです。きのうなんか、いっぺんに三日ぶん飲んじゃったんです、薬を」

「ほう」と中年の男は、めんどくさそうに小声で答えて、目を正面にもどした。

「そうしないと、声が聞こえてくるんです。死ね、死ね、おまえなんか死んじまえて。だから、もう薬がなくなっちゃって、それできょう、もらいにきたんです」

中年の男はふたたび青年のほうを向き、足もとの包帯にチラリと目をやった。

なにかしゃべりつづけていないと幻聴が聞こえてくるらしい青年は、さっそく、その、ほかの病院で巻いてもらった包帯のいわれを話し出した。

「一週間はかり前に、昼休みで会社の屋上にいたら……うちの会社は三階建てなんです……そうしたら、また、死ね、死ねって聞こえてきたんで、屋上から飛び降りちゃったんです。すぐ、会社の人たちが病院にかついでいってくれて……もう足のほうはだいぶいいんです」

中年の男は無表情のまま、小さくうなずいた。

青年は、聞き手の反応などおかまいなしに、なおもつづける。

「声のほうは、まだ年中聞こえてるんです。おまえはダメな人間だ、生きている価値はない、死ね、死ねって。だから、きのうなんか、いっぺんに三日ぶん飲んじゃったんです、薬

を。そうしないと、声が聞こえてくるんです、死ね……」

青年がそこで口をつぐんだのは、自分の声に重なって「矢野さん」という声がしたからだだった。

それが彼の幻聴でなかった証拠に、となりの中年の男が立ち上がり、声の主である、若い看護婦のほうへ歩き出した。五、六歩行った所で、男は「あつ」と低く叫んで引き返してきた。ソファの横にある風呂敷包みを取ると、背広の青年には目もくれず、足ばやに、待っている看護婦の前へ行った。看護婦は「2号室へどうぞ」と廊下の奥を指さした。

男は「どうも」と看護婦に頭を下げ、奥のドアの上に突き出した〈第2号室〉という標示板を見据えて、そこへ近づいて行った。

2

秋葉医師は書類から目を上げ、タバコをステンレスの灰皿でもみ消した。

灰皿から糸のように立ちのぼった、青白い煙の向こうでドアが開き、風呂敷包みを持った男がはいってきた。秋葉の背後の大きな窓から差し込んだ、午後の陽射しが、白い壁をバツクに、その男の姿を浮かび上がらせる。

秋葉は、このときの第一印象を大事にすることにしていった。患者だけでなく、家族の場合にも、その人と患者との間の何かを感じ取ることができる。

いまはいって来た男は、うっすらと不精髭がのびていた。着ているジャンパーがこざっぱりしているところを見ると、それほど不精者とも思えない。おそらく、この数日、髭を剃る気も起こらないような状態にあったのだろう。

秋葉は、観察しながら腰を浮かし、両手でテーブルの前に押しやるような格好をして、

「わたくし、矢野とし江さんを担当することになりました秋葉と申します。どうぞよろしく」

と、軽く頭を下げた。

患者の夫、矢野は深々とおじぎをした。

「どうぞよろしく願います」

「さあどうぞ」

秋葉は相手の言葉が終わらないうちに、前の椅子を指さして「どうい、自分も腰を下ろした。」

「どうも……」矢野は椅子に坐ると、秋葉の顔をのぞきこむようにして、「先生、とし江の様子はどうかいまいしょうか」

「だいぶ落ち着かれたようです。さっきお会いして話をして

きたんですが、きょうは食事もちゃんと食べましたし……おとといの晩は、こんなものは食べられないといって、ぜんぶ撤いてしまったんですが……ゆうべはお風呂にもはいりまして、もうすっかり落ち着いたようです」

秋葉は、分裂病者の示す「仮面様顔貌」のように無表情な顔で、淡々と説明した。三年前、この病院にはじめて勤務したころは、意欲に燃え、治療上のことで、何度か院長とい争ったこともあったが、いまではもう、すべてを職業として割り切っていた。

「あのう、まだ電波がどうか、いっておりますでししょうか」

「きょうは、いっておられませんでした」

「そうですか、では……」

「しかし、おそらく、それをわたしにいうと、病氣だといわれるので、警戒していわなかったのだと思います」

「……………」

「ええと……」秋葉はテーブルの上の書類を引き寄せ、ペンを取った。「おととい、副院長がいろいろおたずねしたと思いますが、今後の治療の参考にさせていただくために、もう一度、二、三、おたずねしたいことがあるのですが……」

「はあ、どうぞ」

「ええと、奥さんと結婚なさったのは……」秋葉は書類の、副院長の字で Heiraten とある所に目をやった。「四年前ですわ」

「そうです」

「奥さんが病気ではないかとお感じになったのはいつごろですか」

「この二月のはじめでした」

「それはどんな点ですか」

「はじめは、となりの人が自分の悪口をいつているのが聞こえるといい出しまして……あたくしは、そんなこと気にするなと笑っていたのですが、そのうちにこんどは、電波がかかってきて、あたしの皮膚を荒らそうとしているといい出しました」

明らかに妄想性分裂病である。

「……それで、あたくしも、これはおかしいんじゃないかと思ひまして、保健所に行こうと思ったのですが、その矢先に、おととい、包丁を持って近所のうちにどなりこんだので、とうとう警察のごやっかいになることになってしまったわけなんです」

「そうですか……ええと、それからですね。奥さんのご実家のほうのご家族に、精神病の方はいらっしゃいませんか」

「さあ、いないと思いますが……あのう、精神病は遺伝なのでしょうか」

「いちがいに遺伝とはいいい切れませんが、統計から見ると、精神病患者の家系には、やはり精神病の発生する率が高いのです」

「……………」

「とし江さんには、お子さんがいらっしゃいませんね」

「はあ、いまの子供は、あたくしの、死んだ、前の家内のあれなんです」

この矢野という旋盤工は四七歳、患者のとし江とは年が二〇以上も開いている。二人は、2DKのアパートで、矢野と先妻との間にできた高校生の子供二人と一緒に暮らしていた。その辺の複雑な関係が、あるいは発病のきっかけになっているのかもしれない。しかし、こういった家族の内部の事情を、第三者が正確に知ることはむずかしい。こういうことも、精神病の治療の障害の一つになっている。

「先生、とし江はなおるんでしょうか」

と矢野は、秋葉の顔を見つめて、いった。

こういう場合、しんから患者がなおって帰ってきてくれることを願っている人と、こんな病気になるってしまったては世間体もあるし離婚するよりほかない、できればずっと病院で面

倒を見てもらいたいと内心望んでいる人と二通りあるが、矢野は明らかに、数少ない前者のほうだった。それだけに、慎重に答える必要があった。

「ほかの病氣と違ひまして、何カ月で完全になおるといふようなことは申し上げられませんが、むかしと違ひまして、いまではいい薬もありますし、わたくしたちもできるだけのことをいたしますから……」

「だいたい、何カ月ぐらいですか」

「そうですね。矢野さんの場合……半年ほどは入院なさる必要があると思います」

「半年ですか」

矢野は目をしばたき、はじめて室内を見回した。

部屋の中には、テーブルと二脚の椅子のほかになにもない。それが六畳ほどの部屋を倍ぐらいの広さに見せている。

「入院の手続のほうは、おすみになりましたね」

「はい、副院長先生が、措置入院とかで、なにしてくださいまして、きのう保健所で手続きしてまいりました」

措置入院というのは、人身事故を起こす恐れのある患者に対して、知事が行なう強制入院である。入院費は原則として公費で負担されるが、患者側の意志で自由に退院することはできない。矢野もそれを承知しているはずだった。

「なにか患者さんに渡すものを、お持ちになりましたか」

「はあ、下着を持ってきてくれということでしたので……あのう、先生、とし江に会ってはまずいでしょうか」

「いまお会いになると、興奮するといけませんので、やはり、あと二週間ほどは、お会いにならないほうがいいと思います」

「そうですね」矢野はがっかりした様子で風呂敷をほどき、菓子折のようなものを取り出した。「先生、これはつまらないものですが、ごあいさつがわりに……」

「あ、これはどうもご丁寧に」

秋葉は、いつもの通り一礼して菓子折を受け取ると、それを持ったまま立ち上がった。

「それでは、いま病棟の婦長を呼びますから、ロビーでしばらくお待ちください」

矢野がおじぎを繰り返しながら出て行くのと入れ違ひに、看護婦がはいってきた。

「いまの人、奥さんと二〇ぐらい年が違ひですね。先生、お電話がかかってますよ。さっきもかかってきたんですけど、診察中だから一〇分ほどしてかけてくださいといったら、いままた」

「だからだいい」

「逸見さんという人です」

「そうか……あ、これ、みんなで分けるといい」

秋葉は看護婦に菓子折を渡すと、事務室へ向かった。

「秋葉先生、そのお電話です」

受付の看護婦が指さしてくれた電話器を、取った。「お待ちせしました。秋葉です」

受話器から、若い女の声が流れてきた。

「逸見でございます。その節は、いろいろとごやっかいになりました」

「あ、どうも。お父さん、その後いかがですか」

「ええ、おかげさまで、すっかり元気になりました」

三月ほど前まで、更年期うつ病で通院治療に来ていた患者があったが、電話の主は、いつも付き添って来ていた、その人の娘だった。

「それは、けっこうでした。で、きょうはなにか？」

「はい、じつは先生にちょっとご相談したいことがあるんですけれども……」

「お父さんのことですか」

「いいえ、父のことではなくて、ほかのことなんですけど……」

「とおっしゃいますと？」

「あの、先生、きょうお帰りの途中にでも、ちょっとお時間を拝借できないでしょうか。駅前の喫茶店か何かで」

患者の家族から、人生相談のようなものを受けることは、ときどきあったが、秋葉は、深くは立ち入らないことにしていた。まして、病院のそとへ呼び出されたことなどは、一度もなかった。

しかし、いま三月ふりに逸見のり子の声を聞いて、秋葉は、はじめて立ち入ってみようという気になっていた。

「きょうは七時から、ちょっと会合があるんですが、その前でしたら……」

「まあ、ありがとうございます」

「駅前の喫茶店だったら、そう、五時半ごろでどうですか」

「あの、ちょっと聞きとれないんですけれど」

秋葉は、時間を繰り返して、大声でいった。

駅の赤電話かららしく、列車の音が聞こえていた。

3

秋葉が喫茶店へ着いたとき、約束の時間をほんの二、三分過ぎていただけだったが、逸見のり子の前におかれたコーヒ

「Ⅰ・カップにはすでに口がつけられていた。

「まあ、どうもお呼び立てしたりして、申しわけありませんでした」

のり子の口調は、前に一週間おきに会っていたときより、ずっと他人行儀だった。

病院では、本人の治療の前に、家族だけを呼んで患者の日常の様子などを聞くが、のり子の父がよくなった最後のころは、本題をはなれて、音楽の話などよくしたものだ。秋葉は一度彼女を映画にでも誘ってみようと思っていたのだが、いいそびれたまま、父親の治療が終わってしまったのである。

「先生、なんになさいますか？」

「ぼくも、コーヒーにしようかな」

のり子はウェイトレスを呼んでコーヒーを注文し終わると、あらためて頭を下げた。

「その節は、父がほんとうにごやっかいになりました……」

「お元氣になられて、けっこうでした。その後、ずっとおうちに？」

「ええ。でもこんど、お話があって、知り合いの人のやっている会社就職することになりました」

「それは、よかったですね」

のり子の父は、永年勤めていた会社を去年、停年で退職し、そのあとすぐ、うつ病になった。本人も再就職を希望していたし、秋葉もそれをすすめていたのだった。

秋葉は運ばれてきたコーヒーに砂糖を入れて、かきまわした。

店内には、テナリ・サックスのソロの「無情の夢」が流れていた。のり子は、スピーカーのほうを見て、眉をしかめ、秋葉のほうに目をもどすと、

「先生、あたくし、このごろ耳鳴りがするんです」といった。

彼女の真剣な表情は、それがきょう秋葉を呼んだ理由であることを語っていた。

「耳鳴りですか……」身の上相談のようなものを期待していた秋葉は、拍子抜けがした。「耳鳴りだったら、耳鼻咽喉科へ行ってみてもらったほうがいいですよ」

「ええ、もうみていただいたんです」

「……………」

「精密検査してもらったんですけれども、どこにも異状はないといわれました。病氣もないし、聴神経系にも異状はないそうです」

「そうですか。血圧は、はかりましたか」

「ええ、一三〇なんですけれども……」

のり子は、じつと秋葉の目を見つめた。

秋葉は、やっと彼女の考えていることが読めた。最近、しろうと向きの精神病関係の本がだいぶ出ているようだが、どうもあまりいいこととはいえない。彼女は、精神病に遺伝が関係あることを知り、気にしているのだ。そして、耳鳴りと幻聴を混同しているらしい。

「一三〇というのは、ちょっと高いようですね。でも、これはぼくの専門外だから」秋葉は微笑してみせ、「まあ、脂肪分や塩分を、あまり取らないようにすればいいでしょう。ぼくも学生時代、試験勉強の最中に耳鳴りがしたことが、よくありましたよ」

「あら、ほんとう？」

「気にしていると、なかなかとまらないが、いつも、いつの間にか、しなくなっているんです。あなたも、あまり気にしないことですね」

「ええ」と、のり子は微笑した。

「あなたのおつとめのほうは、ずっと？」

のり子は、この喫茶店の近くの洋裁店で働いているはずだった。

「ええ。でも、もうやめようと思っているんです」

「……………」

「父も、自分の就職がきまったので、もう根をつめる仕事は、からだに良くないからやめろっていつてくれますし……」

「それでは、いよいよおうちで花嫁修業ってわけですね」

のり子は、高校を出てから、もう四年洋裁店に勤めているといっていたから、二二か三である。父の病気のため、青春時代を半年ほど犠牲にしたといえる。父親も、そのことで負い目を感じているのだろう。

「あら、そんなじゃないんですけど……それで、父は新しい生活にはいる前に、一度く、のほうへ行って整理してきたことがあるっていうんです」

のり子は、そこでふいにまたスピーカーのほうを向いて、眉をしかめた。テナー・サクスのソロは、これもナツメロの『君恋し』に変わっていたが、レコードも針もすり減っているらしく、ノイズが多い。

「音が悪いですね」

と秋葉はいった。

「ええ、音も悪いですけども、あのレコード、33回転よりずっと回転数が早いです。あたし、さっきから、そのことが気にかかって……」

「ほう」

秋葉は感心した。そういえば、音が少しキンキンしている。音楽が好きで、自分でもピアノと声楽をやっているというのり子は、音に対する感覚が異常に鋭いようだ。

「それで、父が一度くへ帰るといので」のり子は話を元にもどした。「あたし、父と一緒に一月ばかり、くへのほうへ行つてこようと思うんですけれど……」

「そうですか。おくにはどちらでしたっけ？」

「岡山なんです」

「きびだんこの本場ですね」

「まあ、先生ったら……」

のり子はしかし、うれしそうに、伯父がやっているという果樹園のことや山陽新幹線のことを話しはじめた。

結局、秋葉は岡山の話を聞くために、のり子に呼び出されたような結果になってしまったが、考えてみると、それは話し合いが成果をあげた証拠でもあった。つぎの予定があるので、秋葉は六時四〇分ごろに喫茶店を出て、のり子をバスの乗り場まで送つて行ったが、バスのステップの前で「おみやげ買ってきますわね」とふり返つたのり子の顔は、さっき喫茶店で会ったときより、ずっと明るくなっていた。

4

海岸沿いのホテルのロビーは、けっこうぎやかだった。

まだ四月のはじめなので、泊り客はほとんどいないらしいが、いくつかある広い部屋が、結婚式やパーティー用の貸し席として、この近辺の人たちに重宝がられているのである。

秋葉がボーイに案内されて行つた部屋の入り口には「青年会議所様」という名札がかかっていた。はいつて行くと、コの字型にならべられたテーブルについていた人たちが、一斉に顔を向けた。みんな、秋葉と同じくらいの、三〇前後の人たちばかりだった。

その中の一人が立ち上がってきた。

「やあ、どうもごろうさま」

高校で秋葉と同窓だった、谷村という、駅の北口で大きな酒屋をやっている男である。

「会頭を紹介するよ」

二人が近づいて行くと立ち上がった会頭は、やはり三〇年配で、ひどく背が高かった。秋葉と交換した名刺には、自分の姓を冠した木材会社の専務取締役という肩書きがついていた。要するに、材木屋の若主人ということらしい。